

日韓関係は戦後最悪と言われていた。それは、歴史問題に絡む徴用工問題が大きなネックになっていたからである。戦時中、朝鮮から徴用されて働かされた人々が、日本に賠償を求めた裁判で、韓国大法院（最高裁）は、日本企業に賠償命令を出した。日本政府は、1965年の「日韓請求権協定」で請求権は完全、最終的に解決されていると、韓国大法院の判決を無視した。韓国では、日本は歴史認識で誠実ではないと大きな反発が起こった。

ところが、韓国の尹錫悦大統領は、韓国の財閥から賠償金を支払うという形で、徴用工問題に決着をつけた。日本政府は当然と見なしているが、犠牲を受けた徴用工たちは納得していない。しかし、この解決方で、日韓関係は一気に改善し、両首脳は今後シャトル外交を再開すると言う。国同士が仲良くなることは望むことだが、この背景には、中国を封じ込めようとする米国の力が働き、日韓の関係改善を推し進めたのではないか。

国と国の間で問題が起こると、互いに面子があり、複雑で一筋縄では解決できないことを示した。ロシアのウクライナ侵略戦争は停戦、終戦の見通しが全く見えない。解決ができない最中、どこでも、弱い立場の民衆が犠牲を負うことになる。

2011年に出版された『あの時、ぼくらは13歳だった—誰も知らない日韓友好史—』に心が洗われた。1932年生の韓国の天文学者・羅逸星さんと1933年生のテレビプロデューサーの寒河江正さんは日本が植民地支配をしていた朝鮮の旧城津中学校で同級生だった。二人は1945年4月、13歳で中学校に入学し、日本の敗戦までの4ヶ月間、一緒に過ごした。戦後、羅さんは寒河江さんに会いたいと懸命に探した。そして、41年ぶりで、ソウルの金浦空港で劇的な再会を果たした。羅さんが寒河江さんに会いたいと思った理由は下記のような出来事にある。二人は同級生と共に防空壕を掘っていた時、朝鮮人の生徒同士が喧嘩を始めた。寒河江さんは朝鮮語で「朝鮮の仲間同士で喧嘩なんかして、どういうことだ。やめろ！」と注意した。中学校で朝鮮語を話したのはその時の一回だけだったと言う。それを聞いていた、教務主任の父親を持つEが「君は今、朝鮮語を話しただろう」と言った。朝鮮語を話すことを禁じられ、話せば、少なくとも一週間の停学を受ける時代であった。寒河江さんは、その時「朝鮮人が朝鮮語を話して何が悪いんだ！」と大きな声で怒鳴った。すると、勢いづいていたEが何事もなかったかのように、静かになった。寒河江さんは、そのことを全く覚えていなかった。ところが、羅さんは「朝鮮人が朝鮮語を話して何が悪いんだ！」という言葉が忘れられなかった。民族の言葉を奪われ、名前も日本名に変えられる屈辱は耐え難いものであった時代、寒河江さんの一言は彼の心の奥底に残った。戦後、寒河江さんに会いたいと、あらゆる手立てを尽くし、ようやく探し当てて、再会できた。民族の友好とは、このように働くものだと思った。本書では、その後、寒河江さんは日本に辿り着くまで、羅さんは朝鮮戦争での苦労を、そして、互いの人生を語り合っている。

私は、二人と同年代の三人の話聞いたことがある。二人は、朝鮮の学生たちと仲良く過ごしたと言う。戦後も交友が続き、一方の方は、最近まで、同窓会を開き、行ったり来たりしていた。もう一人は、朝鮮人を虐め、差別する態度を取っていたと言う。彼女は、日朝関係の歴史を知り、差別したことを恥じていた。教会でツアーを組み、韓国旅行をした時、彼女はガイドさんに小声で「私は韓国人を虐めました。ごめんなさい」と言っていた。ガイドさんはにこにこ笑っていた。時代が作った価値観に無批判に乗ってはならないということである。国同士が、平和を作ろうと未来志向の関係を築くことは素晴らしいことである。過去の事実と誠実に向き合うことが共生への対話を可能にするのではないか。